

## 植民地ジェンダー史研究を振り返る

### Looking Back at Studies of Colonial Gender History

金 富子  
KIM Puja

東京外国語大学大学院総合国際学研究院  
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

キーワード  
ジェンダー史 植民地主義 朝鮮

Keywords  
Gender History; Colonialism; Korea

*Quadrante*, No.25 (2023), pp.345–355.

『クアドランテ』編集委員会からこれまでの研究を振り返る機会を与えられた。約30年にわたって植民地朝鮮ジェンダー史を中心に研究してきた(その半分は本学だった)が、次のように分けられるように思う。(1) 女性史研究としての在日朝鮮人女性(運動)史、(2) ジェンダー史研究としての植民地朝鮮教育史、(3) セクシュアリティ研究としての日本軍「慰安婦」問題(運動史含む)、植民地公娼制、現代韓国／日本の性搾取研究である。番外編として(4) 植民地「満洲」に関する共同研究もあげられよう。以下、研究を中心にしながら、関連する活動にも少し触れつつ見ていきたい。

まずは、(1) 在日朝鮮人女性(運動)史からだ。社会人を経て30代だった1992年にお茶の水女子大学女性文化研究所(その後ジェンダー研究センター、現在はジェンダー研究所)の研究生になった。その動機は未解明の在日朝鮮人女性運動を発掘したいと思ったからだ。ちょうどジェンダーという新しい概念が日本に登場し始めた頃であり、院ゼミでジョン・スコット著『歴史学とジェンダー』を精読したこと

を覚えている。ジェンダー研究との出会いだった。同センターの舘かおる先生に東京女性財団研究活動助成研究への応募を勧められたことをきっかけに、金栄さんと共著で論文「第2次世界大戦(解放)直後の在日朝鮮人女性運動」(1994年)を書くことになった。先行研究のないなか、金栄さんと分担して当時の女性リーダーたちに体当たりでインタビューをしたが、金栄さんの経験豊かな取材方法に学ぶことが多かった。印象的だったのは本名を取り戻す活動、文字を取り戻す識字教育活動に関する語りだった。植民地時代に朝鮮半島で生を受け日本に渡った在日一世の女性たちの多くがまともな教育を受けられなかったため、非識字だったのだ。わたしの母の世代にあたる。一方、リーダーは教育をうけた女性たちだった。かなり拙い論文だが、ずいぶん後になって同じ分野を研究する後続の女性研究者たちから「励まされた」という声をもらったのは嬉しかった。

この分野に関わって書いた論文に『在日』についての『日韓条約』(1993年)、在日の社会保障・戦後補償問題を論じた「国家を棄てる日」



(2004年)、在日一世女性を描いたドキュメンタリー映画の表象について論じた「HARUKO」(韓国語のみ、2007年)、「在日朝鮮人女性と日本軍「慰安婦」問題解決運動」(2009年)、関東大震災時に虐殺された朝鮮人と無責任な流言・新聞報道との関係を論じた「関東大震災時の『レイピスト神話』と朝鮮人虐殺」(2014年)などがある。

次に、(2) ジェンダー史としての植民地教育史研究である。これは、前述の在日朝鮮人一世女性たちに加えて、日本軍「慰安婦」サバイバーたちとの出会いが動機になっている。1991年8月に韓国で金学順さんが初めて実名でカミングアウトして同年12月に来日したことが契機となり、韓国をはじめアジア各国のサバイバーが相次いで名乗りをあげた。そのプロセスに関わるなかで、韓国で初めて「慰安婦」問題について問題提起した尹貞玉先生(梨花女子大学教授、当時)との出会い、金学順さんをはじめ来日したサバイバーたちの証言集会、在日朝鮮人女性たちと携わった韓国の「慰安婦」サバイバー証言集の翻訳出版(後述)、老境を迎えたサバイバーたちの共同生活を描いた映画『ナヌムの家』を観たこと等に強く促されて、植民地女子教育をテーマにすることにした。修士課程では休学して子連れで韓国に語学留学をし、戻ってから早稲田大学図書館にこもって20年分の植民地期の新聞記事をマイクロフィルムで調べて視力を悪化させた(現在は韓国のインターネットで簡単に検索可能!)

女性史として書いた植民地女子教育に関する修論を博論ではジェンダー史として全面的に書き直した。植民地教育のなかでも初等教育に、「就学」ではなく「不就学」に着目したのが特徴だった。植民地下では民族別に就学する教育機関が異なり、就学政策も異なった(民族要因)。義務教育制が実施されなかったため学校に通うには授業料が必要であり、その支払い可

否は児童が属する階級で決まった(階級要因)。これらにジェンダーの差異が加わり、就学と不就学を分けた(ジェンダー要因)。とりわけ「不就学」にこだわったのは、植民地期の女性たちの圧倒的多数が「不就学」、それゆえ「非識字」だったからだ。植民地教育を「就学」だけで論じると、「不就学」だった女性たちは不可視化されてしまう。女性たちの教育／不教育経験を浮上させるためには、民族、階級に加えてジェンダーの差異は不可欠なのだ。ジェンダー概念を取り入れることで民族・階級との相互作用から、就学／不就学の構築過程の分析が可能になるからだ。さらにインタビューした在日一世の女性たち、日本軍「慰安婦」朝鮮人サバイバーたちの証言を取り入れた。朝鮮人サバイバーたちの「慰安婦」にされる前の証言は、植民地下の女性たちが置かれていた圧倒的な貧困や(不)教育状況が語られた貴重な語りだった。これらは韓国女性運動による証言記録活動に負うところが大きい。

ともあれ博論に加筆修正して初の単著『植民地期朝鮮の教育とジェンダー』を2005年に出版して、同年秋から韓国の韓信大学校に着任した。韓国では3年半にわたる单身生活を満喫しつつ、新自由主義が席卷する民主化後の現実に触れ、韓国の研究者、とくにフェミニスト研究者や活動家たちと交流を深めた。そうしたなか本書が第1回女性史学賞を受賞したことは励みになったし、趙慶喜さん、金友子さんという在日出身の優れた翻訳者を得て本書の韓国語版を出版できたのは嬉しかった(2007年)。

この分野に関わる論文をかなり書いたが、2010年の朝鮮史研究会大会報告をまとめた「植民地教育が求めた朝鮮人像とジェンダー——皇民化政策期を中心に——」が印象に残る。博論で扱えなかった皇民化政策期(1937～1945年)を対象にしたため、博論と併せて植民地期全体をほぼカバーできたためだ。

続いて(3)セクシュアリティ研究としての日本軍「慰安婦」問題、植民地公娼制、現代韓国・日本の性搾取問題に触れたい。現在に至るまで約30年間、一貫して関心をもって追求してきたテーマだ。植民地主義と家父長制との関係性が凝縮されていると考えるからだ。

その出発点は尹貞玉先生や在日女性たちとで共著『朝鮮人女性が見た「慰安婦問題」』(1992年)を刊行し、同書に韓国女性運動に関する拙文を書いたことに遡る。1993年には在日女性たち(従軍慰安婦問題ウリヨソンネットワーク)と証言集の翻訳・刊行に関わった。その後、日本の戦争責任資料センター(1993年発足)の「従軍慰安婦」部会に参加して吉見義明先生、林博史先生、西野瑠美子さん、川田文子さん、梁澄子さんたちと共同調査研究を行った。その成果をまとめた『共同研究 日本軍慰安婦』(1995年)に分担執筆した拙文「朝鮮植民地支配と朝鮮人女性」が掲載された。この拙文に力量不足を痛感したことから、本格的に植民地朝鮮とジェンダーに関する研究したいという思いを強くした。

1990年代には西野さん、松井やよりさんをはじめ加害国日本の女性の責任として問題解決のために奔走する多くの日本人女性たちに出会った。なかでもVAWW-NET ジャパン(戦争と女性への暴力日本ネットワーク、1998年結成)のメンバーとして2000年女性国際戦犯法廷の準備のため起訴状作成チームに入り、複数の朝鮮人「慰安婦」サバイバーの証言に対応する文書などの事実調べをした。忘れられないのは、国際シンポジウムが開かれた中国上海から調査チームを組んで武漢へ飛び、現地在住のサバイバーの河尚淑さんに共同で中国語・日本語・朝鮮語のチャンポンでインタビューしつつ、漢口慰安所跡を踏査したことだった。証言で語られた地名や部隊名が文書にみごとに照合したし、慰安所や兵士の生々しい様子は

当事者でしか語り得ないと確信した。何よりも日本敗戦後に現地に留まらざるをえなかった残酷さ、歳月の重さを感じ入った。その記録は『女性国際戦犯法廷の記録』全6巻(2000～2002年)に収録された。

その後、VAWW-NET ジャパンは2011年にVAWW RACに改編された(2021年活動休止)。この間に西野瑠美子さん、小野沢あかねさんと編著で数冊の関連書籍を出版した。法廷関連はもちろん、3冊の証言集を翻訳・刊行できた(2006年、2010年、2020年)のは意義深かった。また2013年には、ネット右翼による歴史修正主義の跋扈にネットに対抗するために、研究者、活動家、市民、学生とともにFight for Justice(正式名称:日本軍「慰安婦」問題 web サイト制作委員会、構成団体:日本の戦争責任資料センターとVAWW RAC)を結成して、エビデンスに基づく事実関係を多言語で発信する学術的なwebサイト(<https://fightforjustice.info>)を開設して、現在に至っている。本サイトから3冊の入門的ブックレット(うち1冊は韓国語版刊行)を、岡本有佳さんと編著で『平和の少女像』に関する書籍を刊行した。

さて、東京外国語大学に縁ができたのは、2001年1月に開かれた戦後東アジアプロジェクト(研究代表:中野敏男先生)主催の研究集会に参加してからだった。大雪を掻き分け会場に入ったら満席だったのを覚えている。女性法廷やNHK番組も話題になっていた。この集会に関するコメントを書いたことから声をかけられ、戦後東アジアプロジェクト主催の研究集会に参加するようになり、報告内容が『継続する植民地主義』(2005年)、『沖縄の占領と日本の復興』(2006年)に論文として掲載された。中野先生との編著『歴史と責任』(2008年)もその延長上にある論文集だった。前述した「HARUKO」に関する論文も、2006年10月



に本学で開かれた「戦後東アジアプロジェクト・国際共同シンポジウム：植民地主義とディアスポラになった朝鮮人女性たち——コリアン・ディアスポラ・ウィメンズ・スタディーズでの出会い」での報告に基づく。本プロジェクトの「継続する植民地主義」というコンセプトに魅了され、2冊目の単行本『継続する植民地主義とジェンダー』を刊行した(2011年)。また、中国やフィリピンからサバイバーを招いて、女性国際戦犯法廷10周年国際シンポジウムを本学のアゴラグローバルで開催した(主催：同実行委員会)が、中野先生をはじめ多くの先生方、海外事情研究所に協力をいただき、満席になったことも忘れられない。

本学着任後の主なテーマは、朝鮮の植民地都市の遊廓形成に関する研究だった。実は、2003年から植民地公娼制の先駆的研究をしてきた宋連玉先生をはじめ金栄さん、庵途由香さんたちとともにトヨタ財団助成金を得て植民地公娼制に関する共同研究(代表：金栄さん)を立ち上げ、韓国各地の旧遊廓跡を踏査した。同年、メンバーと朝鮮民主主義人民共和国の平壤、清津、羅南を初訪問した。これらをまとめた『軍隊と性暴力』(2010年)に韓国南部の群山の遊廓形成に関する拙文が掲載された。これを学内の研究会で報告したところ、吉田ゆり子先生に遊廓社会研究会(代表：佐賀朝先生)に誘っていただいた。遊廓社会研究会は日本近世・近代の遊廓の実態を研究する研究者の集まりであり、研究の奥深さに目を開かされた。共同研究の科研にも加えていただき、『遊廓社会2』(2016年)に馬山・鎮海の遊廓形成について書いた。後日、出版社から声がかかり、わたしがソウルなど朝鮮南部を、金栄さんが朝鮮北部を分担して『植民地遊廓』(2018年)にまとめることができた。

2010年代後半から、韓国各地の旧遊廓に関する研究、踏査や韓国のフェミニスト研究者・

活動家、さらに日本の10代女性支援をしている女性団体との交流から、現代韓国・日本の性搾取問題へと関心が広がった。旧遊廓が現在に続く性売買集結地に衣替えした例も少なくなかったからだ。植民地主義の継続をみる思いだった。日韓の性販売女性に関する共同研究(代表：小野沢さん)に加わり、大邱、釜山、ソウル、全州などの性売買集結地を踏査しつつ、性売買女性を支援する女性団体を訪問してフェミニスト活動家や性売買経験当事者女性たちから直接話を聞いたことは得難い経験になった。韓国の活動家を書いた論文「韓国における性売買の政治化と反性売買女性人権運動」(本誌21号掲載、2019年)を翻訳したり、別の活動家を書いた書籍『性売買のブラックホール』(2022年)を監訳したり、性売買経験当事者ネットワーク・ムンチが書いた『無限発話』(仮題、2023年出版予定)を監修したりしている。

以上の(1)、(2)、(3)に関して、実は板垣竜太先生が初単著までの研究を「金富子氏のお仕事について」(『女性史学』第17号、2007年)で手際よくまとめて下さっている。同誌には筆者の女性史学賞受賞の講演録や舘先生、西野さんのコメントも収録されている。また『ジェンダー研究を継承する』(2017年)には筆者のインタビューが掲載されている。ありがたいことだ。

最後は、番外編としての(4)植民地「満洲」に関する共同研究だ。そもそもは本学で2015年に中国東北スタディツアーを実施したことに始まる。3カ国4大学の学生たち、中野先生、橋本雄一先生、院生だった朴紅蓮さん、飯倉江里衣さんとともに行った延辺で、中国朝鮮族の郷土史家である李光平先生、孫春日先生(延辺大学)に出会い、李先生の案内で現地を踏査した。これをきっかけに科研を得て翌年から共同研究(代表：筆者)をすることになり、本学の

教員（中野先生、橋本先生、野本京子先生、吉田先生、澤田ゆかり先生、倉田明子先生）7名をメンバーに、教務補佐（朴さん、飯倉さん、金理花さん）とともに、長野県飯田市（満蒙開拓平和記念館、飯田市歴史研究所含む）、中国東北各地（延辺、ハルビン、長春、瀋陽、大連、旅順など）、韓国（ソウル、原州）を踏査し、李先生や孫先生を招いたシンポジウムや各種の研究会を開催した。国際シンポジウム（2016年）では、写真家でもある李光平先生が撮った珠玉の写真の数々がパワーポイントで提示された。これに感銘をうけて、中野さん、橋本さん、飯倉さんとともに数年がかりで『「満洲」に渡った朝鮮人たち』（2019年）の刊行にこぎつけ、李先生を招いて新宿の高麗博物館や学内でも写真展示会を行った。日本の植民地主義が朝鮮人にもたらした記憶と痕跡について、中国東北（旧「満洲」）へと視野をさらに広げる必要性を痛感したのだった。

この約30年間にわたる研究や活動を通じて、実に多くの方々と出会い、さまざまな影響や刺激を受けて今日に至ったことを実感する。そのなかでも在日朝鮮人一世女性たち、朝鮮人「慰安婦」サバイバーたち、最近では性売買経験当事者女性たちに出会って直接語りを聞いた衝撃や感動が、植民地朝鮮ジェンダー史研究の動機になるとともに、植民地主義と家父長制の輻輳性／交差性とその克服に関心を持ち続けることができた原動力だったように思う。感謝を捧げて締めくくりたい

（2023年2月15日記）

## 研 究 業 績

金 富子

### I. 著書(単著)

〈日本語〉

1. 『植民地期朝鮮の教育とジェンダー ―就学・不就学をめぐる権力関係』世織書房, 2005年, 380頁. (\*女性史学賞第1回(2007年1月))
2. 『継続する植民地主義とジェンダー ―「国民」概念・女性の身体・記憶と責任』世織書房, 2011年, 260頁.

〈朝鮮語(訳書)〉

1. 『학교 밖의 조선여성들―젠더사로 고쳐 쓴 식민지교육』조경희・김우자 옮김, 일조각, 2009년, 403쪽. (『植民地期朝鮮の教育とジェンダー』の翻訳)

### II. 編纂書(共著・共編著・責任編集)

〈日本語〉

1. 「韓国女性運動からみた朝鮮人慰安婦問題」尹貞玉他著『朝鮮人女性が見た「慰安婦問題」』三一書房, 1992年.
2. 「『在日』についての『日韓条約』」女たちの現在を問う会編『銃後史ノート7戦後編 ベトナム戦争の時代 女たちは』インパクト出版社, 1993年, pp.142-143, pp.144-156.
3. 「朝鮮植民地支配と朝鮮人女性」吉見義明・林博史編著『共同研究 日本軍慰安婦』大月書店, 1995年, pp.202-217.
4. 「Q&A」「解説」従軍慰安婦ウリヨソンネットワーク編(金富子・梁澄子ほか著)『もっと知りたい「慰安婦」問題―性と民族の視点から』明石書店, 1995年, pp.72-77, pp.78-112.
5. 石出法太・金富子・林博史編著『「日本軍慰安婦」をどう教えるか』梨の木舎, 1997年.
6. 「Q 2」「Q 13」「Q 14」アジア女性資料センター編『「慰安婦」問題Q & A 「自由主義史観」へ女たちの反論』明石書店, 1997年.
7. 「河床淑さんのケースにみる漢口慰安所」VAWW-NET ジャパン編(金富子・宋連玉責任編集)『「慰安婦」・戦時性暴力の実態 I』明石書店, 2000年, pp.232-261.
8. 「女性国際戦犯法廷が乗り越えたものと乗り越えなかったもの」VAWW-NET ジャパン編, 西野瑠美子・金富子責任編集『裁かれた戦時性暴力―「日本軍性奴隷制を裁く女性国際戦犯法廷」とは何であったか』白澤社発行/現代書店発売, 2001年, pp.230-253.
9. 「植民地期・解放直後の朝鮮における公娼認識―女性の身体をめぐるナショナリズムとジェンダー」岩崎稔/大川正彦/中野敏男/李孝徳編著『継続する植民地主義―ジェンダー/民族/人種/階級』青弓社, 2005年, pp.168-191.
10. 「女性国際戦犯法廷とは何だったのか―1990年代から振り返る」VAWW-NET ジャパン編, 西

- 野瑠美子・金富子責任編集『消された裁き——NHK 番組改変と政治介入事件』凱風社, 2005 年, pp.16-46.
- 11.「朝鮮植民地支配と「慰安婦」戦時動員の構図」アクティブ・ミュージアム女たちの戦争と平和資料館編、西野瑠美子・金富子責任編集『証言 未来への記憶 アジア「慰安婦」証言集 I——南・北・在日コリア編上』, 明石書店, 2006 年, pp.196-227.
  - 12.「日本の“戦後復興”を問い直す——問題の所在」中野敏男／波平恒夫／屋嘉比収編著『沖縄の占領と日本の復興——植民地主義はいかに継続したか』青弓社, 2006 年, pp.179-196.
  - 13.「「慰安婦」問題と脱植民地主義——歴史修正主義的な「和解」への抵抗」金富子／中野敏男編著『歴史と責任——「慰安婦」問題と 1990 年代』青弓社, 2008 年, pp.100-121.
  - 14.「朝鮮南部の植民地都市・群山の性売買——遊廓・アメリカタウン・性売買集結地」宋連玉・金榮編著『軍隊と性暴力——朝鮮半島の 20 世紀』現代史料出版, 2010 年, pp.86-124.
  - 15.「女性国際戦犯法廷後の韓国女性運動と日本——フェミニズム、ナショナリズム、植民地主義」大越愛子・井桁碧編著『現代フェミニズムのエシックス』青弓社, 2010 年, pp.141-170.
  - 16.「1930 年代植民地朝鮮の教育とジェンダー規範の変容——「良妻賢母」から「皇国女性」へ」石川照子・高橋裕子編著『ジェンダー史叢書 2 家族と教育』明石書店, 2011 年, pp.166-187.
  - 17.「植民地教育史」, 『岩波講座 東アジア近現代通史 別巻 アジア研究の来歴と展望』, 岩波書店, 2011 年, pp.265-290.
  - 18.「国民基金の失敗——日本政府の法的責任と植民地主義」「戦争と女性への暴力」リサーチ・アクションセンター編、西野瑠美子・金富子・小野沢あかね責任編集『「慰安婦」バッシングを越えて——「河野談話」と日本の責任』大月書店, 2013 年, pp.68-85.
  - 19.「植民地朝鮮における遊廓の移植と展開——植民地都市馬山と鎮海を中心に」佐賀朝・吉田伸之編著『シリーズ遊廓社会 2 近世から近代へ』吉川弘文館, 2014 年, pp.261-294.
  - 20.『Q&A 「慰安婦」・強制・性奴隷——あなたの疑問に答えます (Fight for Justice ブックレット 1)』日本軍「慰安婦」問題 web サイト制作委員会編、吉見義明・西野瑠美子・林博史・金富子責任編集, 御茶の水書房, 2014 年.
  - 21.「朝鮮人「慰安婦」に少女は少なかった?」ほか『Q&A 朝鮮人「慰安婦」と植民地支配責任——あなたの疑問に答えます (Fight for Justice ブックレット 3)』日本軍「慰安婦」問題 web サイト制作委員会編, 金富子・板垣竜太責任編集, 御茶の水書房, 2015 年.
  - 22.「ベルリンのホロコースト記念碑とソウルの〈少女像〉」ほか『〈平和の少女像〉はなぜ座り続けるのか』日本軍「慰安婦」問題 web サイト制作委員会編, 岡本有佳・金富子責任編集, 世織書房, 2016 年.
  - 23.『「帝国の慰安婦」と消去される加害責任——日本の知識人・メディアの言説構造を中心に』中野敏男・板垣竜太・金昌禄・岡本有佳・金富子編『「慰安婦」問題と未来への責任』大月書店, 2017 年, pp.132-151.
  - 24.「「表現の自由」と「慰安婦」問題」安世鴻・李春熙・岡本有佳編『誰が〈表現の自由〉を殺すのか——ニコンサロン「慰安婦」写真展中止事件裁判の記録』御茶の水書房, 2017 年, pp.94-103.



## 研究業績

25. 「序」「京城Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」「馬山・鎮海」金富子・金榮著『植民地遊廓——日本の軍隊と朝鮮半島』, 吉川弘文館, 2018年, pp.1-27, pp.31-103, pp.104-132.
26. 「ジェンダー・セクシュアリティ」, 日本植民地研究会編『日本植民地研究の論点』岩波書店, 2018年, pp.100-110.
27. 「植民地帝国日本と朝鮮人の移動」『「満洲」に渡った朝鮮人たち——写真でたどる記憶と痕跡』李光平写真・文, 金富子・中野敏男・橋本雄一・飯倉江里衣責任編集, 世織書房, 2019年, pp.155-159.
28. 「日本社会で「慰安婦」被害を「聴くこと」の不可能性と可能性——ポスト・サバイバー時代に被害証言を未来に渡すために」金富子・小野沢あかね編著『性暴力被害を聴く——「慰安婦」から現代の性搾取へ』(共編著), 岩波書店, 2020年, pp.189-209.
29. 「植民地遊廓と朝鮮の女性たち——日本の近代公娼制の朝鮮移植と日本への還流」高麗博物館朝鮮女性史研究会『朝鮮料理店・産業「慰安所」と朝鮮の女性たち』社会評論社, 2021年, pp.9-36.
30. 「アリランから K-POP まで(朝鮮半島／韓国)」山口裕之・橋本雄一編『地球の音楽』東京外国語大学出版会, 2022年, pp.102-106.

## 〈朝鮮語／英語〉

1. 「위안부 문제와 탈식민주의」『역사와 책임: 위안부 문제와 1990년대』나카노 도시오・김부자(지은이), 이해숙, 오미정(옮긴이), 도서출판선인, 2008년.
2. 「조선 남부 식민지 도시 군산 성매매」, 송연옥 김영 편저 『군대와 성폭력——조선반도의 20세기』박해순 옮김, 도서출판선인, 2012년, pp.101-143.
3. 「국민기금은 왜 실패했는가」전쟁과 여성 대상 폭력에 반대하는 연구행동센터 역음『그들은 왜 일본군 '위안부'를 공격하는가——강제연행, 고노 담화, 국민기금을 둘러싼 논쟁의 핵심을 말한다』김경원, 김계자, 김정희, 최재혁, 하종문 옮김, Humanist, 2014년, pp.95-112.
4. 『Q&A '위안부' 문제와 식민지 지배 책임』이타가키 류타, 김부자 역음, 배영미, 고영진 번역, 삶창, 2016년.
5. “The Failure of the Asian Women’s Fund: The Japanese Government’s Legal Responsibility and the Colonial Legacy”, “Insight on the Issues: The Mobilization of Korean Adolescents as Comfort Women: Colonialism and the Victimization of Teenage Girls.” In: *Denying the Comfort Women: The Japanese State’s Assault on Historical Truth*. edited by Nishino Rumiko, Puja KIM, Akane Onozawa, Routledge, 2019, pp.93-113, pp.136-147.
6. “The “Comfort Women” Redress Movement in Japan: Reflections on the Past 28 years” In: *The Transnational Redress Movement for the Victims of Japanese Military Sexual Slavery*. edited by Pyong Gap Min, Thomas R. Chung, Sejung Yim, De Gruyter Oldenbourg, 2021, pp.43-69.



## III. 論文 / Paper

〈日本語〉

1. 「第2次世界大戦(解放)直後の在日朝鮮人女性運動」(金栄との共著), 『東京女性財団研究活動助成研究報告書』1994, pp.2-6, pp.13-18. (20頁中)
2. 「1930年朝鮮国勢調査にみる識字とジェンダー」, 『人民の歴史学』, 142号, 1999年, pp.13-34.
3. 「1910～1920年代植民地期朝鮮における初等教育機関への就学——民族・階級・ジェンダー諸要因分析を中心に——」, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科『人間文化論叢』, 2巻, 2000年, pp.85-97.
4. 「『複数のカテゴリーの輻輳』はあったか」, 『現代思想(総特集:戦後東アジアとアメリカの存在)』vol.29-9, 2001年, pp.256-259.
5. 「女性国際戦犯法廷が乗り越えたものと乗り越えなかったもの」, 『現代思想』2001年5月号, pp.206-215.
6. 「植民地期朝鮮における普通学校『不就学』とジェンダー——民族・階級との関連を中心に——」, 『歴史学研究』, 764号, 2002年, pp.13-25.
7. 「植民地期朝鮮における普通学校『就学』とジェンダー規範の変容——1920年代の女子教育論と『賢母良妻』という規範の構築をめぐる——」, 『青丘学術論集』, 22巻, 2003, pp.227-262.
8. 「国家を棄てる日——在日朝鮮人の社会保障・戦後補償問題を中心に」, 『現代思想』, 29巻6号, 2004年, pp.194-203.
9. 「植民地教育とジェンダー——教育版植民地近代化論を再考する」, 『現代思想』, 33巻10号, 2005年, pp.192-203.
10. 「ジェンダー史として植民地朝鮮教育史を書き直す(〈女性史学賞〉2007年度受賞者の講演録・コメント)」, 『女性史学』, 17号, 2007年, pp.32-41.
11. 「「慰安婦」問題と脱植民地主義——歴史修正主義的な「和解」への抵抗」, 『インパクション』第158号, 2007年, pp.124-147.
12. 「宗主国／植民地における『臣民』とジェンダー——兵役義務・参政権・義務教育制」, 『季刊 戦争責任研究』, 66号, 2009年, pp.11-23.
13. 「在日朝鮮人女性と日本軍「慰安婦」問題解決運動——1990年代ヨソネットの運動経験から」, 『戦争と性』第28号, 2009年.
14. 「ジェンダー史・教育史から見た植民地近代性論」, 『歴史学研究』, 867号, 2010年, pp. 34-45.
15. 「『韓国併合』100年と韓国の女性史・ジェンダー史研究の新潮流」, 『ジェンダー史学』, 第6号, 2010年, pp.85-91.
16. 「植民地教育が求めた朝鮮人像とジェンダー——皇民化政策期を中心に——」, 『朝鮮史研究会論文集』, 49号, 2011年, pp.111-149.
17. 「日本の市民社会と『慰安婦』問題解決運動」, 『歴史評論』, 761号, 2013年, pp.24-40.

## 研究業績

18. 「関東大震災時の『レイピスト神話』と朝鮮人虐殺」, 『大原社会問題研究所雑誌』, 669号, 2014年, pp.1-19.
19. 「植民地末期=戦時体制期朝鮮における「帝国の教化」の包摂と排除——女子勤労挺身隊と女子青年錬成隊を中心に——」, 『民衆史研究』, 91号, 2016年, pp.35-50.
20. 「上野流フェミニズム社会学の落とし穴——上野-吉見論争とその後を振り返る——」, 中央大学商学研究会『商学論叢(吉見義明教授古稀記念論文集)』, 58巻5・6号, 2017年, pp.103-135.
21. 「文在寅政権と「慰安婦」問題への新方針——「被害者不在」から「被害者中心アプローチ」への転換」, 『現代思想(特集=朝鮮半島のリアル)』2018年.

## 〈朝鮮語／英語〉

1. 「재일동포여성의 생활과 남북통일에 관한 의식」, 이화여자대학교 한국여성연구원 『여성학논집』 제12집, 1995년, pp.171-204.
2. 「여성국제전범법정이 뛰어넘은 것과 뛰어넘지 못한 것」, 『당대비평 특별호(기억과 역사의 투쟁)』(「女性国際戦犯法廷が乗り越えたものと乗り越えなかったもの」, 『当代批評 特別号』), 2002년, pp.369-389.
3. 「HARUKO——재일여성・다이스포라・젠더」, 『황해문화』(「HARUKO——在日女性・ディアスポラ・ジェンダー」『黄海文化』), 2007卷冬号, 117-147, 2007年.
4. 「식민지 시기 조선 보통학교 취학동기와 일본어——1930년대를 중심으로」, 한국사회사학회『사회와 역사』(「植民地期朝鮮の普通学校就学動機と日本語——1930年代を中心に」, 『社会と歴史』) 제77집, 2008년 봄, pp.39-55.
5. 「한국의 〈평화의 소녀상〉과 탈진실(post-truth)의 정치학: 일본의 식민주의 / 남성중심적인 내셔널리즘과 젠더를 검토한다」, 『한국여성학』(「韓国の〈平和の少女像〉と脱真実の政治学: 日本植民地主義／男性中心主義的ナショナリズムとジェンダーを検討する」, 『韓国女性学』) 제33권3호, pp.279-322.
6. Global Civil Society Remarks History: “The Women’s International War Crimes Tribunal 2000”, *Position* 9-3, Winter, 2001, pp.611-620.

## ●翻訳・監訳(責任編集・解題・解説を含む)

1. 『証言 未来への記憶 アジア「慰安婦」証言集Ⅰ——南・北・在日コリア編 上』アクティブ・ミュージアム女たちの戦争と平和資料館編, 西野瑠美子・金富子責任編集, 明石書店, 2006年.
2. 『証言 未来への記憶 アジア「慰安婦」証言集Ⅱ——南・北・在日コリア編 下』アクティブ・ミュージアム女たちの戦争と平和資料館編, 西野瑠美子・金富子責任編集, 明石書店, 2010年.
3. チョン・ミレ／イ・ハヨン著「韓国における性売買の政治化と反性売買女性人権運動」の翻訳と解題, 東京外国語大学海外事情研究所『クアドランテ』, 記事・総説・解説・論説等, 2019年, pp.305-320.

4. 李東振著「民族、地域、セクシュアリティ——満州国の朝鮮人「性売買従事者」を中心として」(監訳), 『クアドランテ』, 22号, 2020年, pp39-62.
5. 韓国挺身隊問題対策協議会・二〇〇〇年女性国際戦犯法廷証言チーム著『記憶で書き直す歴史——「慰安婦」サバイバーの語りを聴く』(古橋綾との編訳), 岩波書店, 2020年.
6. 「植民地支配下の教育問題」(翻訳・解題)、吉野 誠[責任編集]・小川原宏幸[編集協力]『原典朝鮮近代思想史5 民族の解放と社会変革——1920年代』岩波書店, 2022年, pp.330-349.
7. シンパク・ジニョン著『性売買のブラックホール——韓国の現場から当事者女性とともに打ち破る』(監訳), ころから, 2022年.

●インタビューなど

1. 「第17章 金富子」佐藤文香・伊藤るり編『ジェンダー研究を継承する(一橋大学大学院社会学研究科先端課題研究叢書)」人文書院, 2017年.